



海外交流

短期留学生受け入れの意義

— 大阪大学短期留学特別プログラム OUSSEP の3年 —

北 浜 榮 子*

The Significance of Short-term Student Exchange

— The Past Three Years of the Osaka University Short-term Student Exchange Program(OUSSEP) —

Key Words : Osaka University Short-term Student Exchange Program(OUSSEP),
AIEJ Short-term Student Exchange Promotion Program(Inbound)
Scholarship, International Exchange Subjects

1. はじめに

OUSSEP(大阪大学短期留学特別プログラム)は今、4年目のプログラムが進行している。1996年10月の創設時より、筆者はOUSSEPのコーディネーターを務めてきた。本稿では、OUSSEPの成果を検討することによって、大阪大学における短期留学生受け入れの意義を明らかにする。なお、草創期のOUSSEPについては本誌前稿〔Vol.49, No.4 (1997)〕を参照していただきたい。

2. 短期留学

1983年以後、わが国では「留学生受け入れ10万人計画」に基づいて外国人留学生の受け入れが行われてきた。留学のタイプは大きく「文明伝承型」と「文化学習型」に分けられる。近年、諸外国で活発化した後者のタイプの「短期留学」へのニーズがわが国でも高まってきた。短期留学は、一般に、「主として大学間の交流協定に基づいて行われ、母国の大学に在籍しながら外国の大学で教育を受ける短期間(概ね1年以内)の留学」をさす。

1995年3月、文部省の短期留学推進に関する調査研究協力者会議の最終報告で、短期留学推進の重要

性と短期留学生受け入れのための基盤整備の必要性が指摘された。

この会議では以下に示すような意義に基づき、短期留学生の受け入れ推進が提唱された。

1. より多くの留学生が広汎な国から留学してることが期待されること
2. 日本人の学生と外国人の学生との相互啓発が深められること
3. 日本の大学の教育研究指導方法の大幅な改善や一層の国際化が図られること

また、同会議で、学位取得を目的とする長期間の留学生にくらべて短期留学生の奨学金の支給が不十分であることが指摘された。このため、短期留学生のための奨学金制度として、1995年に、文部省による短期留学推進制度が創設された。現在、同制度が適用される短期留学プログラムは国立17大学に設置されており、これらの大学の動向が注目を浴びている。OUSSEPはこのような主旨を具現するプログラムとして大阪大学に開設されたものである。

上記の「短期留学生受け入れ推進の意義」で述べられた3つの期待にOUSSEPは応えることができたのであろうか。以下、順に検討する。

2.1 多くの国からの留学—国際的開放性

OUSSEPは1年の短期留学プログラムであり、この1年という短期間に日本語に堪能でない外国の学生でも効率的に学ぶことができるように、教育言語として英語を使用する。募集の際に日本語能力が問われないので、学位取得を目的に来日する留学生に比べると、より多くの国の、より多くの大学生に留学の機会が開放されているといえる。

受け入れ留学生の数は毎年、22~28人で、1996年から2000年春までの合計はちょうど100人である。

* Hideko KITAHAMA
1944年8月13日生
1972年大阪大学大学院・理学研究科・高分子学専攻博士課程修了
現在、大阪大学留学生センター・大学院工学研究科(兼)、助教授、理学博士、高分子固体構造論、科学教育、科学技術日本語
TEL 06-6879-7128
FAX 06-6879-7119
E-Mail kkitahama@user.center.osaka-u.ac.jp



大学間、部局間協定を含めて、大阪大学と学生交流協定を締結している外国の大学は現在58あり、今までに学生を受け入れた実績のある大学の数はそのうちの20大学(15ヶ国)である。北アメリカ、アジア・オセアニア、ヨーロッパの3地域間のバランスを考慮しながら、可能な限り多くの国、多くの大学から学生を受け入れる方針を貫いてきた。年々、参加大学の数は順調に増加しており、1年目には皆無であったヨーロッパからの参加者も今では確実に3分の1を占めるに至った。

個々に協定を結ぶ大学間や部局間協定大学に加えて、今年の秋からは複数の大学と同時に協定を結ぶコンソーシアム方式による協定大学も加わる。今後、さらに様々な形で外国の大学と協定が結ばれ、学生交流の提携大学の数が加速度的に増えると思われる。しかしながら現時点では、受け入れ能力には限度があり、許容規模は留学生寮の収容能力面からは30名程度、短期留学推進制度の奨学金の支給面からは20数名である。昨年までは同奨学金による留学生ばかりであったが、今年では自国の奨学金や自費負担で留学する学生が2名含まれている。今後、短期留学推進制度の奨学金を必ずしも必要としない留学生が増えていくことが見込まれる。このような事情を反映して、OUSSEPへの志願者数は増加傾向にあり競争が激化することが予想される。

今、在籍している28人のOUSSEP留学生は、世界15ヶ国の19大学から来ている。毎週1回開かれる「OUSSEP アセンブリー(学生自治によるホームルーム)」は、国際色豊かなクラスメイトが一堂に会し、自国文化、自大学文化を吐露する場であり、OUSSEPの国際的開放性を実感できる最適の場になっている。

2.2 留学生と日本人学生の相互啓発—国際的交流性

OUSSEPの授業科目は大阪大学の正規科目であり、国際交流科目と呼ばれる。大阪大学の学生であれば、日本人学生も受講でき単位も認められる。国際交流科目の授業は、英語で行われる以外にも、通常授業とは異なったスタイルのユニークな授業が展開され、日本人、外国人を問わず、受講生はほとんど全員、カルチャーショックを受けることになる。この効用として、留学生と日本人学生の相互啓発につながることは明らかである。

日本人学生が国際交流科目の授業をうけることの

メリットは、英語力を向上させるのに役立つこと、国際交流を身近に体験できること、海外留学のためのトレーニングの場として利用できることなどであり、OUSSEPは大阪大学の学生の意識の国際化に大いに役立っている。OUSSEPの1期生とともに学んだ日本人学生の1人が、工学部を卒業後、カリフォルニアのビジネス・スクールで学び、今もアメリカで情報関連の会社で働いている。これはOUSSEPの国際的交流性とその効用を発揮した例であろう。彼のように国際交流科目を受講後、留学の夢を果たす学生が次々に現れることが期待される。

OUSSEPの授業への日本人学生の参加者数は年々、増加傾向にあり、1999年秋学期にはOUSSEP以外に89名の履修届出者がいた。ただし単位取得まで到達した学生はその5分の1であり、これを改善し日本人学生が参加しやすい状況を作るために種々の努力をしている。学生へPR用の印刷物を配布し国際交流科目の知名度をあげることや、取得単位を卒業に必要な単位(卒業要件単位)に振り替え可能にすることも一部の学部では実施された。学部、付置研究所等の協力を得て、OUSSEPの国際的交流性の効用がさらに機能していく方向を模索している。

2.3 既存の大学教育への問題提起—国際的通用性

OUSSEPの留学生は交換留学生として、自分が在籍する大学の制度や雰囲気をもそのまま背負って大阪大学にやって来る。そして1年後には自国の大学に復学する。彼らがスムーズに大学間を移動するためには、到達目標や授業内容に関するパートナー大学との調整が必要になる。異なった国の大学間の調整であるから、当然、それは国際的通用性が要求される。

OUSSEPの単位認定における国際的通用性について述べる。学生交流協定を提携した大学との間に単位互換に関する覚え書きが交わされているので、留学生が大阪大学で取得した単位は自分の在籍大学で認定してもらうことができる。留学先の大学から送られてきた成績表やシラバスを参考にしながら母校の大学の裁量で認定作業が行われることが、双方の大学の合意事項になっている。実際にはレポートや授業の資料等をこまめに集めるといふ留学生自身の努力とともに、大阪大学側の教官の入念な協力に依存する部分が大きかった。多くの教官はレポートにかなりの量のコメントを付して返却したり、成績評価についても国際的な違いに配慮をしたと聞く。

いわば大学間双方の国際的便宜性の上に単位互換の約束が実行されているといえる。

次に教育内容面での国際的通用性について述べる。留学生を対象に実施した「授業に関するアンケート」によると、教官に英語による講義能力を期待し、欧米式の活発な議論や質問ができるインタラクティブな授業を望むという結果がでた。実際には多くの教官がこれを実践してきた。3, 4年生で研究指導を受けることができる自主研究科目も学生の人気は高かった。この自主研究科目は米国の大学の要請で導入されたものである。また、毎学期、7～10回程度、授業の一環として実施される会社、研究所、地方自治体などの見学は、大学以外の人間との交流体験の機会としても留学生に好評であった。講義主体の大阪大学の通常授業では見学は行われないことから、この見学は日本人学生にも開放している。

上述の教育内容には、欧米基準(世界基準?)に合わせたものと日本文化や日本社会などの地域性を強調するものの、一見相反するものが含まれている。国際的通用性は両方の意味をも包含するものと筆者は考える。これはまた、大阪大学のモットー「地域

に生き、世界に伸びる」に合致するものである。

OUSSEPの教育プログラムにおけるこの特徴は、実は既存の大学教育には欠如しているものであり、大学教育に関する議論では改善すべき点として、しばしば指摘されてきた。これを先取りした形でOUSSEPが導入した結果になり、大学内の関係者に与えたインパクトは大きかったと筆者は考える。

3. お わ り に

本稿では、国立大学における短期留学プログラム開設時に提言された留学生受け入れの3つの意義、すなわち、国際的開放性、国際的交流性、国際的通用性についてOUSSEPの成果を検討した。

その後、1999年3月、文部省の留学生政策懇談会の報告で「国際社会に知的貢献する人材の育成」の観点から留学生を受け入れることの必要性が提言された。この目的を達成するために、留学生受け入れプログラムではなく、世界の優れた学生を日本に引きつけるためのプログラム開発の必要性が増大している。この視点からみたOUSSEPプログラムの再検討を今後の課題としたい。

